

氏名	橋本 由美子 (ハシモト ユミコ)
本籍	東京都
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博甲第 85 号
学位授与の日付	2018 年 9 月 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	長 田 久 雄
	(副査) 桜美林大学教授	杉 澤 秀 博
	桜美林大学教授	渡 辺 修一郎
	東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長	藤 原 佳 典

論 文 審 査 報 告 書

論 文 目 次

【緒言】	1
文献		5
【第一研究】	7
和文抄録		7
ABSTRACT		8
I. はじめに		9
II. 方法		10

1. 対象地区および対象者	10
2. 分析方法	10
Ⅲ. 倫理的配慮	11
Ⅳ. 結果	11
1. 対象者の属性	11
2. 老研式活動能力指標得点に対する独居類型の影響	12
3. WHO-5-J 得点に対する独居類型の影響	12
Ⅴ. 考察	12
謝辞	
【第一研究についての論文投稿, 学会発表について】	14
文献	15
図表	17
【第二研究】	22
抄録	22
ABSTRACT	23
I. はじめに	24
II. 研究方法	25
1. 対象地区および対象者	25
2. 分析方法	26
3. 倫理的配慮	26
Ⅲ. 研究結果	27
1. ベースライン時 (2013 年) の対象者の属性	27
2. 2013 年の独居類型別にみた 2 年後の追跡率	27
3. 2015 年の追跡状況別にみた 2013 年の分析対象者の特徴	27
4. 2013 年の独居類型別にみた 2015 年の世帯形態	27
5. 老研式活動能力指標総得点の変化量	27
6. WHO-5-J 得点の変化量	28
Ⅳ. 考察	28
Ⅴ. 結語	29
謝辞	
【第二研究の学会発表について】	30
【総合考察】	31
【結論】	35
【本研究の限界と課題】	36
謝辞	
文献	38

論文要旨

本論文の構成は、「諸言」、「第一研究」、「第二研究」、「総合考察」、「結論」、「本研究の限界と課題」となっている。

諸言では、高齢化率の急速な上昇は少子化、核家族化を伴って進んでおり、65歳以上人口に占める独居高齢者の増加は三大都市圏でより顕著に進んでいるという日本の社会的課題を背景として、本研究は独居高齢者の配偶関係に着目し、独居を「別居」・「離別」・「死別」・「未婚」の4つのカテゴリーに類型化し、独居類型と健康指標との関連を分析検討することが述べられている。

方法として、調査は2013年7月に東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チームが作成した「高齢者の健康と安心な暮らしに関する調査」を東京都A区B地域包括支援センター管内に居住する65歳以上の住民8332名から、要介護度4・5の者および施設入所者を除いた7707名に郵送で実施された。回答が得られた5052人（回答率65.6%）のうち、独居は1104名であり、分析項目すべてに回答した757名を第一研究の分析対象者とした。2年後の2015年に同様の対象者に行われた郵送調査で追跡できた527名のうち、配偶関係が明らかな517名を第二研究の分析対象者としたことが述べられている。

第一研究は、独居高齢者の4類型と、高次生活機能および精神的健康状態との関連を明らかにすることを目的としている。高次生活機能の評価には老研式活動能力指標、精神健康状態の評価にはWHO-5-Jを用い、独居類型、別居子の有無、世帯年収を固定因子、性別、年齢を共変量とした一般線形モデルで老研式活動能力指標総得点とWHO-5-J得点と独居類型との関連を検討した。独居類型と老研式活動能力指標総得点との関連は有意でなかった。一方、WHO-5-J得点は、離別群が最も低く、別居子のいる別居群がとくに低かったことが述べられている。

第二研究は、2013年の対象者について独居類型が、高次生活機能および精神的健康状態の2年間の変化に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。老研式活動能力指標とWHO-5-Jの2年間の変化量を従属変数とし、独居類型、性別、別居子の有無を固定因子、従属変数のベースライン値、年齢、慢性疾患の数を共変量とした共分散分析を用いて分析した。その結果、老研式活動能力指標総得点の2年間の変化量は、別居群で有意に低下していた。WHO-5-J得点は、離別群と死別群で向上することが明らかとなったことが述べられている。

本調査では別居の詳細が不明であるが、今日、配偶者の入院や入所などにより別居により独居になるケースが増えていると考えられ、これらの独居は自治体などの支援リストからもれている可能性があり、詳細な把握を進める必要がある。未婚群も増加が見込まれ、緩衝要因となる同居家族以外の交流を深めることやサポートを強化する介入が特に必要で

あると考えられる。社会的孤立やソーシャルサポートの介在が健康に影響している可能性があり、メカニズムについては今後の課題である。また、若年世代における発達課題として、生涯未婚を減少させるような地域における出会いの場の提供などの政策的な働きかけも必要であると考えている、という考察が述べられている。

以上の結果より、独居高齢者を配偶関係から4つのカテゴリーに類型化した研究はこれまでなかったが、一括りにされがちであった独居高齢者に対して、今後は、配偶者関係を考慮したアプローチが必要であるとの主張が述べられている。

論文審査要旨

学位請求論文の提出後、主査・副査により、提出された論文の査読が行われた。本論文は、独居高齢者の増加という現代日本の課題を背景として、これまで研究されることの無かった、独居高齢者の配偶者との関係に着目し、「別居」・「離別」・「死別」・「未婚」の4つのカテゴリーに類型化し、健康指標との関連を分析検討したものである。こうした独居の特徴の違いと健康指標との関連を明らかにすることには、独居高齢者に対するきめ細かな支援を行うための情報が得られるという意義がある。論文の構成は、「諸言」、「第一研究」、「第二研究」、「総合考察」、「結論」、「本研究の限界と課題」となっている。2013年7月に実施された8,332人の住民調査からすべてに回答した757人を分析対象として横断的（第一研究）、2年間の縦断的（第二研究）の2つの研究が行われた。主な結果として、第一研究では、別居群で別居子のいる場合に健康指標に基づく健康度が低いこと、第二研究では、老研式活動能力指標得点が別居群で低下し、健康度指標は、離別群が向上することが明らかとなった。査読の経過として、先行研究のレビュー、考察の見直しが指摘されたが、適切な加筆・修正が行われ、学位論文の最終試問を受験する水準にあることが全員一致で認められた。

口頭審査要旨

公開で30分の発表、30分の質疑応答の後、主査・副査による可否の判定会議を行った。

主査・副査から、全体として、論文審査の経過における指摘事項に対して修正された内容を基にした発表であり、大きな課題は認められないという意見が述べられた。細かな点として、表現に不明瞭な点があること、調査対象地域に限定した地域の特徴の説明が必要であること、文献表記に不統一な点があることが指摘され、適切な加筆修正を行うとの回答があり、主査・副査から了承が得られた。さらに今後の課題として、考察に述べられている課題をより深める研究を行うこと、研究モデルと仮説を精緻化し発展させることが望まれるという意見があり、今後の課題とするという回答があり、主査・副査から了解が得られた。

以上の発表および質疑応答の経過・結果から、判定会議において、主査・副査が全員一致して、口頭審査は合格であると判定した。